



4. ヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～ 総大会長報告

森山信彰¹、安村誠司²

- 1 ヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～ 大会事務局 事務局長
- 2 同総大会長、福島県立医科大学 理事兼副学長 医学部公衆衛生学講座 教授

このたび、ヘルスコミュニケーションウィーク 2023～福島～ を 2023 年 9 月 30 日～10 月 1 日、福島県福島市の「コラッセふくしま」にて開催しました。本大会は、ヘルスコミュニケーションウィークとしては、3 回目の開催となり、前身である日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会を含めても初の東北地方での開催となりました。本大会では、テーマを『「未知なる不安」に対応するヘルスコミュニケーション—原子力災害・コロナ禍を経験して—』としました。ヘルスコミュニケーションにおける現在の課題と今後の方向性について福島から発信することの意義を考えこのテーマとしました。参加登録者数は 324 名で過去最大規模となりました。プログラムとしては総大会長講演、特別講演、各分科会による 8 つのシンポジウムと一般演題の発表が行われました。

開会宣言の後、総大会長講演『「未知なる不安」に対応するヘルスコミュニケーション—原子力災害・コロナ禍を経験して—』を行いました。特別講演では、福島県立医科大学総合科学教育研究センター教授 後藤あや先生に「ヘルスリテラシーの推進の両輪」と題したご講演を頂きました。福島における保健師や子どもにおけるヘルスリテラシー向上を目指した実践活動等の知見をご紹介頂き、より良い保健・医療を住民に届けるための様々な「両輪」（例えば、理論と実践、患者と医療者）について考える機会を与えてくださいました。第 15 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会シンポジウムⅠは、「原発事故・コロナで見られた未知なる不安への対応」をテーマに開催されました。リスクコミュニケーションやメディアリテラシー、情報の信頼性を評価し質を向上する取り組み、そしてリスク認知の視点から、未知なる不安への対応における課題と可能性について議論する福島らしい情報発信となったと思っています。シンポジウムⅡは、「新型コロナウイルス感染症、そして、今後の健康リスク」をテーマに開催されました。評価が刻々と変わるような健康リスクに対応するコミュニケーションについて情報提供を頂き、将来のインフォデミック・マネジメントへの有益な示唆に富む内容でした。第 3 回日本ヘルスリテラシー学会学術集会は、「理解しやすく行動しやすい健康医療情報の研究と実践：リーダビリティと PEMAT」をテーマに開催されました。パンフレット、ウェブサイト、動画などを用いた健康医療情報について、内容を理解しやすく、かつ情報の受け手が実践しやすいものとするための技術に関する話題提供を頂きました。第 3 回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会は「医療“専門家”としての当事者たち：専門知と実践知の融合を目指して」をテーマに開催されました。当事者研究をリードする研究者、障害者の自立生活に関わる問題解決の取り組む NPO 法人スタッフ、「賢い患者」になるための活動を推進している演者から情報提供を頂きました。第 2 回日本医療通訳学会学術集会は「医療通訳技能評価ルーブリックの開発」をテーマに開催されました。医療通訳教育における形成的評価において活用できる「医療通訳技能評価ルーブリック（学修者に示す学修到達度）」を開発するべく、医療通訳技能評価の項目に関する議論が展開されました。第 2 回日本ヘルスマーケティング学会学術集会は「健康行動とソーシャルマーケティング — 望ましい行動を起こすための仕掛け」をテーマに開催されました。時代背景や生活様式の変化に伴い、疾病も変化している中、マーケティングの概念を健康・医療に適応させて行動変容につなげていく必要性が、実践例をもとに報告されました。第 2 回目

本医学サイエンスコミュニケーション学会学術集会は「SNS・ネット・書籍などを活用した一般の人への医療科学コミュニケーションの最前線」をテーマに開催されました。時代の先端を行く SNS を用いた健康情報の発信、また、旧来型の書籍を用いた医学サイエンスコミュニケーションの実践について、医療者・実践家、最先端知見の研究者によるタイムリーな話題提供を頂きました。第2回日本医療コミュニケーション学会学術集会では、「歯科領域における医療コミュニケーションの現状と展望」をテーマに開催されました。臨床、研究、教育という異なる視座から話題提供いただきました。最優秀演題賞には、須賀万智さんの「パブリックヘルスコミュニケーションへのユーモアの活用～調査結果に基づく提言」が選出されました。今後、益々のご活躍を期待致しております。また、10月2日～10月31日までオンライン会場をオープンし、各シンポジウムの録画映像、一般演題76演題（オンサイト60題、オンデマンド16題）を公開し、質問等は掲示板に書き込むことができるようにしました。対面の大会終了後の参加登録もあり、オンデマンド配信の利便性が感じられました。

学会運営については、予算が限られており実行委員会事務局の人数も少ない中ではありましたが、情報保障（手話通訳）の充実、地元企業が製造するコーヒー牛乳や飲料水の無料提供等の本大会ならではの特徴を盛り込み、派手さはないが手作り感のある、中身の濃い学会を目指し、実行委員会一同、心を込めて準備をして参りました。参加者からは、「特に今回は福島の皆様の経験や現在のご活動を聞けたのが、貴重でした。」などのお言葉を頂きました。一方で、ログイン ID/PW が複数系統あり複雑であったこと（オンライン会場、抄録集、参加登録）、参加費支払い手続き上のトラブルなど、参加者の皆様にはご不便をおかけすることが少なからずありました。この場を借りて、お詫び申し上げます。今後のヘルスコミュニケーションウィーク運営につながる課題としては、会員数と比べて合同参加する学会が増えることによるプログラムの過密さや情報保障実施を含めた安定的な財源の確保、非会員がシンポジストであった場合の過大な費用負担等が挙げられました。

最後に、本大会を福島で開催できたことは大変大きな意義があると考えており、本大会が大きなトラブルなく終わられましたことは、ひとえにヘルスコミュニケーション学関連学会機構理事の皆様のご協力によるものと存じます。機構理事の皆様をはじめ、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。